

著者が、「私の「書く力」を鍛えた 40 冊」を示しているが、自分が読書メモを作成している 1500 冊と 1 冊も重なっていない。自分が、古典、小説、落語を読まないことが主因。ただ、面白いことに『英文標準問題精講』は大学受験の時に使った。大学受験という点でのみ著者との共通点があった。

そもそも、人は文章を読むとき、そこから書いた人の人格を読み取ろうとするものです。

話し言葉をカオス（混沌）だとすると、**文章はコスモス（秩序）**です。

・・・

文章を構築する際のプロセスは、基本的には次の三つになります。

- ①書きたいテーマ（もしくは気づき、主張）を見つける
- ②テーマから**三つのキーコンセプト**「言いたいこと」をつくる
- ③三つのキーコンセプトを結び付けて文章を構築する

このプロセスを身につけるのは、小論文や企画書、あるいは評論などの論理的かつ客観的な文章を書くのに非常に有効です。

文章自体はシンプルでいいのです。あなた自身の言葉で書いた文章によって、読んだ人が**何かしらインスパイア（触発）される文章**……。そんな文章が書けるようになることを最終目標にしてほしいと考えています。

私が、文章についてこれほど**“発見”**や**“新たな視点”**を強調するのは、それを提示する力が強く求められる時代になっているからです。

エッセイはつらつらと心情を連ねるもの

一冊の本は原稿用紙三〇〇枚ぐらいの分量

文章というものは、書いているうちに文脈があちこちに蛇行してしまいがちです。書いている本人もゴールが見えなくなってしまう、收拾がつかなくなってしまうことも少なくありません。

だから最初に、**最終ゴールとなる最後の一文を決めてしまうべき**なのです。

・・・

多くの人は文章を書こうとすると、つい気負ってしまい、道徳的な言葉で締めくくろうとしがちですが、それでは**力のある文章**にはなりません。

また、後々のことを考えると、このように習慣的に CC で内部に回していることによって、いろんな情報が共有されるという利点もあります。いざトラブルが起きたときにも、「ああ、あの件ね」と、みんながある程度事情を把握できているということになり、上司や同僚にも問題解決に協力してもらえるでしょう。

私の勤めている大学の部署では、**自分と直接関係のない案件も CC で全部回ってきます**。実は、最初は煩わしいと思っていました。ところがそのことによって、自分の分担が変わったり、複数の部署が関係するような判断をしなければならない場合などに、**あらかじめ情報が蓄積されているために、正確な判断をすばやく下せる**というメリットがあることがわかってきました。

CC をつけながら社内で認識を共有していく。自分が今何をやっているのかということをもみんなにわかってもらうという点からも、社内の「認識共同メール」は非常に重要なものだと一言えるのです。

「自分は実力だけで出世してみせる」と言いたいところですが、現実はなかなか難しいものです。

組織の中では、やはり引き上げてくれる人が必要です。

そもそも、日本人は仕事の引き継ぎに関して非常に軽く見ているところがあります。「このような段取りで仕事写ればいいんだよ」と形式的なことを伝えるだけで、さっさと次のところに異動していくケースが多く見受けられます。けれども、それは仕事というものを甘く見ている証拠だと思います。

仕事における経験知は、たいへん重要なものです。その**経験知をしっかりと伝えるのがほんとうの引き継ぎ**というものです。経験知を引き継がないまま異動するという仕事のやり方は、社会人にはあってはならないことです。それは、自分が経験知を必要としないような表層的な仕事しかしてこなかったということ、告白しているようなものです。

文章力には人を動かす力がある。

では、一流の文章とはなんですか？

それは、「人の心を動かす文章」です。

そのような文章を書けるようになるには、まず、自分の日常での心がけや習慣を変えていく必要があります。そうやって本物の「言葉の力」に目覚め、その力を駆使し、言葉を機能的に構築していくことなくして、一流の文章を書くことなど不可能です。

先達の知識を学ぶことなくして、文章を書くことなどできません。

私は、現在のビジネスパーソンが書く力を伸ばすために絶対に読んでおくべき基本書は、**新聞と新書**だと思います。

もちろん、余裕があれば古典を読むべきでしょう。

毎日の新聞からもっとも気になる記事の一つだけ切り抜いて、ノートの左ページに貼り付けます。それから右ページにその記事に関するコメントを書いていくのです。

弁証法とは、「**正・反・合**」のステップによる論理展開法のことです。

たとえばあるテーマに対し、まず「正」である賛成意見を述べ、続いて「反」である反対意見をぶつける。そのうえで最終的に議論の成果である「合」を述べるというやり方です。そうすることで、思考を深め、結論をより高次のものとしていくわけです。

私はこの弁証法を、文章を書く際にも活用すべきだと考えています。

たとえば、プロ野球の名捕手・名監督として活躍した野村克也さんが好んで使う「勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし」という言葉も、江戸時代の大名であり、剣術の達人でもあった松浦静山(まつらせいざん)の剣術書『常静子剣談』が出典です。

長い間、人々に読み継がれてきた言葉は、現代人の心にも強く響きます。

相手と交渉する文章には、かなり高度な技量を求められます。そのときに注意すべき重要なポイントとして、①利益、②オプション、③BATNA(バトナ)という三つが挙げられます。

...

とはいえ、それを文章上、「利益はこれとこれです」と直接的に書いてしまうと、下品な言い方だと思われてしまう危険があります。そこで、「このような点も貴社の今後の事業にお役立ていただけるのではないかと思います」といったような、**婉曲的な表現**で伝えていけばいいのです。

次の「②オプション」は、選択肢を用意することによって、相手が選べる立場にするということです。

・・・

そして三つ目が③BATNA です。これは「Best Alternative To a Negotiated Agreement」を略したものです。

交渉が合意できればそれが最善なのですが、交渉が決裂する可能性は常にあります。そのため、交渉を開始する前に、決裂した場合に備えて用意しておく代替案のことを、BATNA（バトナ）といいます。

最近、本を読むのはそれほど好きではないけれど、書くのが好きだという人が増えています。SNS など、気ままに書ける機会が増えているからかもしれません。

また、文芸誌の文学賞には、多くの応募が寄せられています。そんな人の中には、自分は特殊な体験をしたから小説だって書けるはずだと思っている人も多いようです。

しかし、だからといって、ちゃんと読んでもらえる小説が書けるものではありません。自分にとっては意味のある体験かもしれませんが、それが他の人にとっても同様に価値のあるものだとは限らないからです。

たとえば、恋愛体験にしても、当人にとってはドラマチックなものかもしれませんが、たいていは他人が読んだらありふれたものにしか感じられないでしょう。

一方で、ありきたりの日常の中から、きらめくような瞬間を掴みだして文章に書ける人がいます。また、ありきたりの日常をありきたりではない視点から書くことができる人もいます。

その差を分けるのは何か。

二つあります。一つは、他の人には発見できない何かを見つけてくる「新しい発見をする力」。こちらについては、第2章で詳しく説明してあります。そして、もう一つは「文体」です。

確かに最近の小説やエッセイは、私たちが日常使うような、平易な言葉で綴られているものが多くなっています。また、個人的な体験をそのまま主観的に書いているように見える作品も多い。

しかし、その中で評判を呼んでいる作品は、実は、構成、文章表現の工夫などが凝らされており、多くの人が共感する普遍性を兼ね備えているのです。

文芸誌などに掲載されている小説やエッセイを読んで、「このくらいなら自分でも書ける」と思う人は、ただ内容だけを見てそう判断していることが多い。しかし実際には、たとえ内容がありふれたもののように見える作品でも、「新しい発見をする力」や「文体」に、極めて高い技術が注ぎ込まれているものなのです。

読み手の能力が深まれば深まるほど、文章から読み取れる情報も深みが増し、書き手の能力が高まれば高まるほど、より多くの人に大きな感動を与えられるようになるというわけです。

私は、たとえば本を書くとなると、本を一〇〇冊読んだからといって書けるものではないと思っています。

一〇〇〇冊読んで、やっと一冊著書を出せるというのが、私の皮膚感覚です。つまり、その比率は一〇〇〇対一です。

一度一〇〇〇冊を読んでしまえば、その後はどんどん書きやすくなっていきます。とはいえ、読む量と書く量で言うと、読んだ文字の量が書く文字の一〇〇〇倍は必要だということです。

私の「書く力」を鍛えた 40 冊

- 01 『きまぐれロボット』 星新一著
- 02 『イソップ寓話集』 中務哲郎訳
- 03 『武士の家訓』 桑田忠親訳
- 04 『論文の書き方』 清水幾太郎著
- 05 『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』 上・下 レオナルド・ダ・ヴィンチ著、杉浦明平訳
- 06 『レオナルド・ダ・ヴィンチー天才の素描と手稿』 H・アンナ・スー編、森田義之監訳・小林もり子訳
- 07 『文読む月日』 上・中・下 トルストイ著、北御門二郎訳
- 08 『新編 綴方教室』 豊田正子著、山住正己編
- 09 『ちびまる子ちゃん』 一〜一六 さくらももこ著
  
- 10 『龍馬の手紙』 宮地佐一郎
- 11 『万葉集 全訳注原文付』 一〜四 中西進
- 12 『新版 古事記 現代語訳付き』 中村啓信 訳注
- 13 『枕草子』 上・中・下 清少納言著、上坂信男・神作光一全訳注
- 14 『新版 徒然草 現代語訳付き』 兼好法師著、小川剛生訳注
- 15 『新版 おくのほそ道 現代語訳 曾良随行日記付き』 松尾芭蕉著、潁原退蔵・尾形仿訳注、
- 16 『芭蕉入門』 井本農一著
- 17 『若き数学者のアメリカ』 藤原正彦著
- 18 『ラッセル幸福論』 バートランド・ラッセル著、安藤貞雄訳
- 19 『英文標準問題精講』 原仙作著、中原道喜補訂
- 20 『方法序説』 デカルト著、谷川多佳子訳
- 21 『怪談 牡丹灯籠』 三遊亭円朝著
- 22 『なめくじ艦隊』 古今亭志ん生著
- 23 『古典落語 志ん生集』 古今亭志ん生著、飯島友治編
- 24 『忘れられ日本人』 宮本常一著

- 25『新版 遠野物語 付・遠野物語拾遺』 柳田国男著
- 26『氷川清話』 勝海舟著、江藤淳・松浦玲編
- 27『文語訳 新約聖書 詩篇付』
- 28『ノラヤ』 内田百閒著
  
- 29『金閣寺』 三島由紀夫著
- 30『羅生門 蜘蛛の糸 杜子春 外十八篇』 芥川龍之介著
- 31『富嶽百景・走れメロス 他八篇』 太宰治作
- 32『日本文化私観——坂口安吾エッセイ選』 坂口安吾著
- 33『文章読本』 谷崎潤一郎著
- 34『勝手に生きろ!』 チャールズ・ブコウスキー著、都甲幸治訳
- 35『ベストセラー小説の書き方』 ディーン・R・クーンツ著、大出健訳
- 36『文盲 アゴタ・クリストフ自伝』 アゴタ・クリストフ著、堀茂樹訳
- 37『辞書になった男 ケンボー先生と山田先生』 佐々木健一著
- 38『古代マヤ・アステカ不思議大全』 芝崎みゆき著
- 39『新訳 君主論』 マキアヴェリ著、池田廉訳
- 40『ツァラトウストラ』 ニーチェ著、手塚富雄訳

#### 英文標準開港精講

原仙著作、中原道喜補訂／旺文社／一九三三発行、一九九九年新装版発行／本体八八〇円＋税

美しい英語の名文を味わってもらいたい、ということでもう一冊挙げておきたいのが、この本です。高校生用の英語問題集ですね。

この本に取り上げられている英文は、大学で出題された文章です。それら短い英文を集めて、しっかりと読めるように解説を加えたものです。

私はこの本を高校時代に使って、たいへんな感銘をうけました。ああ、文章というのは素晴らしいな、ということを感じたのです。

この中にはもちろんラッセルも入っていますし、バージニア・ウルフだとか、ハーバード・リードとか、E・M・フォスターとか、まあ、文学界の錚々たる人びとの文章が並んでいるわけです。

おわりに

私が二十代の頃は、自分の考えを世の中に直接発表する手段がなく、たとえ論文を書いても平均論文読者人数はわずかに二人という現実がありました。一生懸命書いても、誰も読んでいないのがありありとわかりました。

また、友だちと同人誌を出したりもしていましたが、それも二〇人ぐらいに配って終わりというものにすぎませんでした。

誰も読まない、あるいは一〇人、二〇人にしか読まれないような環境でしか書くという行為ができなかった時代というのが、私の二十代だったわけです。

...

自分の思考力を常に鍛え続けるイメージで、書き続けましょう。書くことで思考力が鍛えられ、思考することで書く能力が向上する。そういうイメージです。

それを続けていくことによって、文章力が磨かれると同時に、「人間力」もついていくのだと思います。

「読む」「書く」「話す」「聞く」を連動させるということで、人はずっと成長し続けることができます。それはビジネスにおいて絶大な効果を発揮するでしょう。

そしてさらに、それはビジネスの場を超えて、自分自身の人生を充実させていくことにもつながっていくのです。

私も、もっともっと書きながら世界を広げていきます。ともに、書くことで、人間関係を構築し、気づきのある人生を送っていきましょう。

. 1r■、†丁. ,...) \、にrーーへノ